高畑町界隈

東大寺の南側に続く水門町や転害門、般若寺あたりの町並み同様、北側に位置する高畑町には大和らしい風景が多いところです。高畑町には古い土塀が多く、紅葉や緑が美しい大きな木が多い。このあたりには新薬師寺、黒川紀章設計の奈良写真美術館、白毫寺などスケッチに飽きたら観るべき場所も多くあります。また、暗夜小路を書いた志賀直哉邸などもあり、近所の喫茶店でゆったりすることも出来ます。「ならまち」も歩ける範囲内です。奈良町の有料駐車場や高畑町の写真美術館の近くにある有料駐車場もあり、便利です。写真美術館では入江泰吉の大和路の写真展が堪能できます。定期的に展示写真も変わります。奈良写真美術館を出るとすぐ裏手に新薬師寺があります。

秋の高畑町

高畑町はもと春日大社の社家町だったところ。春日山が見える閑静な町です。

文豪の志賀直哉は、この町に魅せられて、自分で設計した家を建てその書斎で「暗夜行路」を書き上げたそうです。新薬師寺のこのあたりは土塀の美しい路があってちょっと迷いそうになります。ぐるっとまわると元の位置に戻っているなど、狭い範囲にいろいろな建物があります。季節の移り変わる自然の中では、見える風景がそのたびに変わるので何度訪れてもよい所です。もともと本当の美は自然の中にはあって、自然には美も質感も量感もすべてが備わっており、それを素直に感じ取る感動や主観を大事にしたいものだと思います。人間がつくる美などは自然に比べればとても小さなものだと感じます。

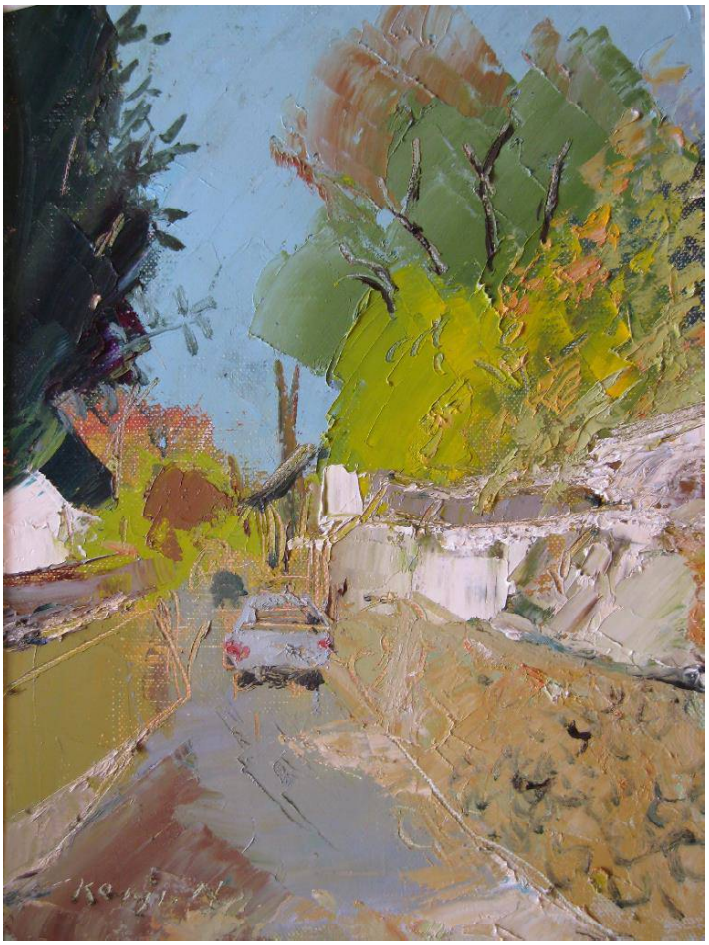
大仏殿より壮大だった新薬師寺

平成二十一年に奈良教育大構内で新薬師寺の金堂跡がみつかり、東大寺大仏殿をしのぐ空前絶後の規模であったことが判明しました。しかし建立後、奈良に吹いた大風によって倒壊し、その後再建されることはなかったといいます。ご本尊の薬師如来像七体だけでなく、十二神将や四天王も安置されています。十二神将は一体が七〇〇〇人の家来をひきつれているといいます。十二支にも対応しています。呼び名は難しく、それぞれ、毘羅（びから）大将、招杜羅（しゃとら）大将、真達羅（しんだら）大将、摩虎羅（まこら）大将、波夷羅（はいら）大将、因達羅（いんだら）大将　珊底羅（さんちら）大将、あに羅（あにら）大将、安底羅（あんちら）大将、迷企羅（めきら）大将、伐折羅（ばさら）大将と呼ばれます。

新薬師寺界隈

「新薬師寺」という名前は、「新しい薬師寺」という意味ではありません。新薬師寺と薬師寺は宗派も違います。新薬師寺の「新」は、「あらたかなという意味です。

平成二十年十一月に隣接する奈良教育大学構内で見つかった八世紀なかばの新薬師寺金堂跡の東西幅が想定よりも十四メートル長く、約六十八メートルにも及んだことがわかりました。これは江戸時代に再建された、今の東大寺大仏殿（幅五十七メートル）をしのぐ規模であることがわかったのです。新聞は「大仏殿よりすごかった新薬師寺」というタイトルで報道しました。奈良教育大の金原正明准教授は「総国分寺である東大寺と同じく諸国の薬師信仰をたばねる寺として建てられたために大規模になったのだろう」と述べています。蛇足ですが、新薬師寺の横に「縁切りでら」というのぼりをたくさん建てた寺がありました。他人との縁を切りたい人もいるのでしょうか？、



萩の寺、白毫寺（びゃくごうじ）

住所　奈良市高畑町１３５２
電話　０７４２　２６　３３９２
花どき　萩（９月中旬～下旬）

新薬師寺からほど近い所に白毫寺があります。白毫寺は９月中旬から咲く萩の花が本当に素晴らしい。最近は、訪れる人が多くなったといいます。四季の花とみ仏を訪ねる関西花の寺二十五カ所のうちの第十八番のお寺です。境内の五色の椿は樹齢四〇〇年以上であるといい、赤と白の大輪の花が樹いっぱいに咲きます。東大寺の糊こぼし椿、伝香寺の散り椿とともに大和の三名椿のひとつと言われる古木です。寺名の白毫（びゃくごう）というのは如来の眉間にある白い巻き毛のことで光明を放つ印。高円山の中腹にあり奈良の町が一望のもとに見渡すことができます。山門に至る萩で囲まれた築地土塀や石畳の階段はとても風情があります。